

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に2006年11月に設立されました。また、日中韓を中心に活動する「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ 年始のご挨拶.....	1
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	2
➤ 会員寄稿記事.....	6
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	13
➤ 会議・イベント案内.....	14
➤ 書籍等の紹介.....	14
➤ 会員募集中.....	15

年始のご挨拶

2013年、新年おめでとうございます。皆様におかれましては日頃よりJRRNのネットワークの活動にご協力いただき感謝申し上げます。

私ごとですが、昨年はずいぶん還暦を迎えました。歳とともに、1年が短く感じられて新年があつという間にやってくるようになりました。「光陰矢のごとし」を実感しています。

まずは、昨年のJRRNの主な活動ですが、会員皆様のご協力、事務局員の努力により、台湾、韓国、フィリピン、マレーシアなどの関係団体の来日に合わせた国際交流、フィリピンやマレーシアのシンポジウム、フォーラムへの参加や現地での交流、国内でも「市民による河川環境の見かた・調べかた～英国『PRAGMO』に学ぶ～」を開催しました。刊行物ではARRN河川再生手引きやPRAGMO日本版の発行、主催した講演会等の講演録の発行など多くの出版物、ニュースメール、ニュースレターの定期的発信に加えて、JRRNの様々な活動、会員からの情報提供等をホームページで公開しました。

また、特に皆様へ報告すべき事項として、昨年11月の中国北京でのARRN運営会議の場で、6年間行ってきたARRN事務局を中国CRRNへ移管したことです。事務局はCRRNへ移りましたが、HP運営などは分担協力しながら進める予定になっています。

JRRNは河川、特に河川再生に関心を持った様々な方々が会員になって活動しています。

ところで、BSのテレビで朝に「里山」という短い番組をやっており、出勤前になんとなく見えています。川がメインの番組ではないのですが、川も多く出てきます。自然豊かな川も出てきますが、先日はコンクリート張りの川が登場して、意外に地域の自然に馴染んだ川として取り上げられていました。ドラマでも川が重要な場面の背景に出てきますが、ドラマの筋より川の様子が気になることがあります。

川の存在意義とは何でしょうか。現実には川のそばに住んでいる人にとっては生活との関わりが大切です。一方、たまに立ち寄る人にとっては普段得られない自然や景観が大切かもしれません。川というよりも人間のほうの問題かもしれません。

河川再生はどのようなものか、どのように進めるのか、JRRNとしても大きな課題です。皆様、多様な考えを持っておられると思います。この変動する時代、ときには基本に返った議論も必要と思います。

JRRNは現在、個人会員が約590名、団体会員が約48団体であり、順調に増加しています。JRRN事務局としては情報提供や会員どうしが有意義な交流ができるようにさらに努力していきたいと考えています。JRRNは皆様の協力を得て、河川再生の発展に貢献できるように努力していきますので皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

JRRN 事務局長 佐合純造

JRRN 事務局からのお知らせ(1)

2012 年の JRRN/ARRN 活動概要報告

JRRN 及び ARRN が事務局を務めた ARRN の 2012 年の主な取組みをご報告します。

2012 年は、JRRN 会員と協働しながら、日本国内の河川再生に関わる知見やニーズの相互共有を促進する役割を担うとともに、JRRN が有する海外ネットワークを活用し、アジアを含む諸外国の優れた知見やニーズを吸収しながら、日本国内の関係者へ還元する機能の強化を図りました。2012 年の JRRN 及び ARRN の活動概要を図-1 に、また活動一覧を表-1 に示します。

2012 年に特に注力した主な取組の概要は次の通りです。

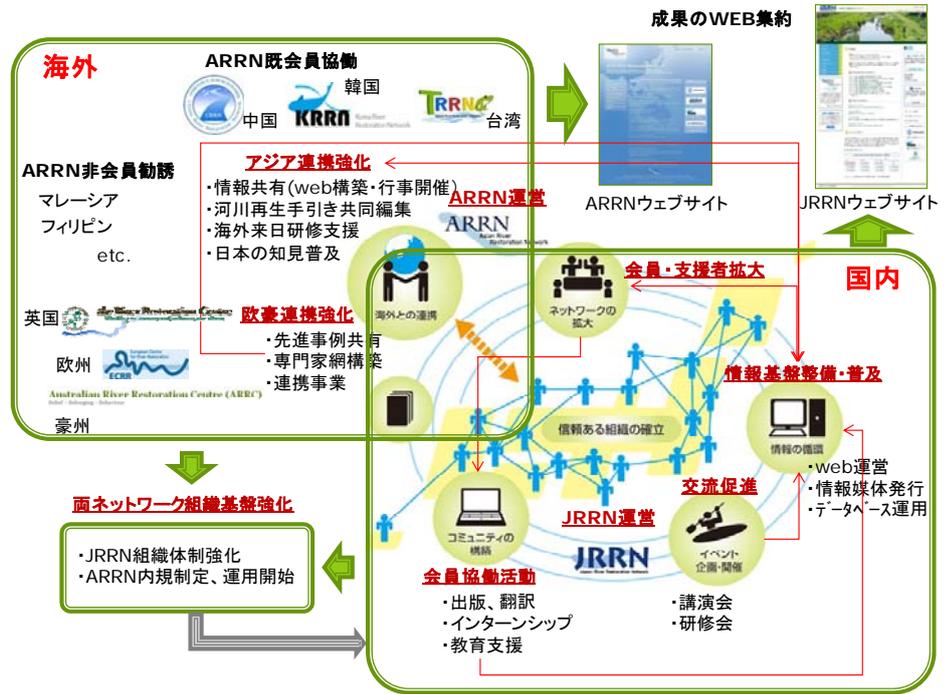


図-1 2012 年の JRRN 及び ARRN の活動概要図

(1) JRRN ウェブ再構築による情報共有基盤強化

掲載情報へのアクセス性向上、双方向交流機能強化、運用管理の省力化を図るため、JRRN ウェブサイト（日本語ページ）の再構築を 2012 年 4 月中旬に実施しました。また facebook を試行し、ウェブサイトへの継続的な情報蓄積、週刊ニュースメールによる新規情報伝達、facebook によるユーザー評価を連動させた情報共有基盤の強化を図りました。

(2) 国際行事参加を通じた国内外ネットワークの拡大

ネットワーク活動の普及および関係団体との連携強化を目的に、JRRN 事務局として表-1（交流促進）に示す 4 件の国際行事に参加しました。

(3) 国内外の要請対応を通じた連携強化と情報蓄積

河川再生に関わる情報提供、講演や研修支援、また国内外関係機関の紹介など、JRRN 及び ARRN に対し様々なリクエストを頂きました。これら要請に対して、ネットワーク活性化の貴重な機会ととらえて、要請機関との連携強化のみならず、その対応成果を可能な限り公開することにより、河川再生に関わる情報・知見の拡充にも努めました。

(4) PRAGMO 翻訳活動を通じた会員・海外連携強化

英国河川再生センター(RRC)より無料公開された河川モニタリング手引き「PRAGMO」の日本語版を、RRC 事務局、JRRN 会員、筑波大学白川（直）研究室、(財)

河川環境管理財団（平成 24 年度河川整備基金助成事業として実施）等の協力を得ながら作成しました。また、この日本語版発行を記念した講演行事を 2012 年 12 月に開催し、PRAGMO 制作責任者である RRC 幹部や国内有識者を講師・パネリストとして招聘し、JRRN 会員及び関係者との技術交流を深めました。

(5) 各種活動成果物の公開による社会的信用の獲得

JRRN 会員の協力を得ながら表-1（成果蓄積）に示す成果物を作成し、ウェブサイトで無料公開しました。特に、利用者に活用されるネットワーク固有知財の蓄積は、信頼向上に伴う会員増加や他組織からの運営面での支援獲得など、ネットワーク諸活動の活性化、更には持続的な発展に寄与することから、今後も成果物の量と質の両面の強化に努めてまいります。

(6) ARRN 内規制定による ARRN 運営基盤強化

ARRN のネットワーク拡大及び円滑な事務局運営に向けて二つの内規を制定しました。この内規の適用開始以降、台中河川・流域再生ネットワーク(TRRN)をはじめアジアの河川再生関連団体が新たに加わりました。(P4 参照) また 2012 年 11 月に ARRN 事務局が JRRN から CRN に移管されました。(P5 参照)

表-1 2012年のJRRN及びARRNの主な活動成果

活動分類	活動成果
<p>情報整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> • JRRNfacebook サイト開設 (1月) • JRRN ウェブサイト再構築 (4月) • ARR/N/JRRN ウェブサイト継続更新 • JRRN ニュースメール発行 (毎週・全51回) • JRRN ニュースレター発行 (毎月・全12回) <p>http://www.a-rr.net/jp/</p> 
<p>交流促進</p>	<ul style="list-style-type: none"> • JRRN 会員及び国内外要請支援 • 諸外国来日視察団の支援・交流 (全4回: 3月-台湾高雄市政府・3月-韓国 NGO・11月-フィリピン自治体・12月-マレーシア政府) • 第1回フィリピン河川サミット参加 (5月) • マレーシア河川フォーラム参加 (9月) • 第15回国際河川シンポジウム参加 (10月) • 第9回 ARR/N 水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム開催 (11月) • JRRN/ARRN 講演会「市民による河川環境の見かた・調べかた」開催 (12月) <p>http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/</p>  <p>マレーシア河川フォーラム ARR/N 国際フォーラム PRAGMO 講演会 マレーシア政府技術交流</p>
<p>成果蓄積</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 第9回 JRRN 河川環境ミニ講座ー中国河川生態系 講演録発行 (1月) • 第8回 ARR/N 水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム 英語版講演録発行 (2月) • ARR/N 河川再生手引き ver.2 日本語版発行 (2月), 英語版発行 (3月) • 桜のある水辺風景 2012 写真集発行 (6月) • 第1回フィリピン国際河川サミット参加報告書発行 (8月) • マレーシア河川フォーラム 2012 参加報告書発行 (9月)、月刊河川への寄稿 (10月) • PRAGMO 日本語版ー河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き発行 (11月) <p>http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/</p> 
<p>組織強化</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ARR/N 会員入会に関わる内規制定 (9月) • ARR/N 事務局分掌に関わる内規制定 (9月) • 第7回 ARR/N 運営会議開催 (11月) • JRRN→CRRNへARR/N事務局移管 (11月)

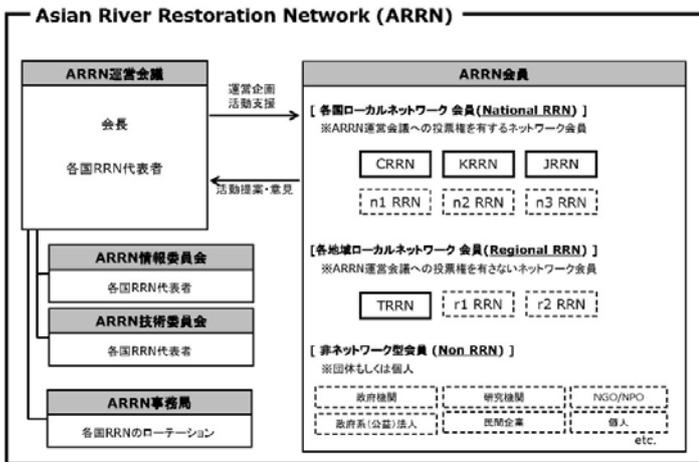
(JRRN 事務局・和田彰)

JRRN 事務局からのお知らせ(2)

JRRN のパートナーが増えました ～ アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)新会員加入報告

2012年9月の会員入会に関わるARRN内規制定、及びそれを受けての新規会員入会について簡単にご報告します。

この会員入会に関わる内規制定プロセスには、2008年以降の懸案であった台湾加入問題に対応するため、オリンピック方式（オリンピック憲章に基づく「国」ではなく「地域」としての参加）を基本とするARRN組織構造（以下の組織図参照）に改めることでARRN関係者の合意に達しました。



ARRN 新組織構造図

本内規では、冒頭で上記ARRN組織図を定義し、各国・地域内のローカルネットワークであるRRN (River Restoration Network: 河川・流域再生ネットワーク) 会員及びネットワークを形成していない Non-RRN (個別) 会員の分類、更に会員種別毎のARRN入会の手続き方法やそれを受けての審査方法を示し、この内容をARRNウェブサイト上で開示しました。

この結果、2012年10月には、非ネットワーク型 (Non-RRN) 会員としてオーストラリア河川再生センター (ARRC) やマレーシアに拠点を置く地球環境センター (GEC) 等の NGO が、更に12月には台湾から台中河川・流域再生ネットワーク (TRRN) が地域ローカルネットワーク (Regional-RRN) 会員として新規加入が実現しました。2012年12月末現在、JRRN (日本)、KRRN (韓国)、CRRN (中国)、TRRN (台湾) の4 - RRN 組織、及び Non-RRN メンバーとしてタイ国天然資源環境省水資源局をはじめとする5つの政府機関、NGO、民間企業等が加入しており、マレーシア天然資源・環境省排水灌漑局の加入 (Non-RRN 会員) に向けた最終調整を現在進めています。

2012年秋以降にARRNへ新規加入した団体の概要を以下にご紹介します。これら団体との情報共有を進めながら、様々な知見を会員の皆様に還元してまいります。

オーストラリア河川再生センター (ARRC)



<http://australianriverrestorationcentre.com.au/>

ヨーロッパ河川再生センター (ECRR) 及び英国河川再生センター (RRC) の助言を受けて2007年に設立された非営利団体。特に河川再生におけるパートナーシップや合意形成を得意とする団体で、設立当初よりARRCのDr. Siwan Lovett代表とJRRN事務局は交流を重ね、河川再生に関わる情報共有を進めている。

マレーシア地球環境センター (GEC)



Global Environment Centre

<http://www.gecnet.info/>

マレーシアを拠点に、アジア各国の環境保全と持続的な天然資源利用の推進を主目的に活動する1998年設立の国際NGO。2012年のマレーシア河川フォーラムを共催し、またパートナーシップを基軸に数々の河川再生事業を展開している。第2回ARRN国際フォーラム (2005年東京開催) でGECのMr. Faizal Parish代表を招聘した。

台中河川・流域再生ネットワーク (TRRN)



<http://www.trrn.tw/index.do>

2007年に台湾・逢甲大学で開催された河川再生シンポジウムにおいてJRRN及びKRRNとTRRNのDr. Chen Hungkwai代表が交流し、ARRN活動趣旨に賛同し2008年にTRRNが設立された。台湾經濟部水利署水利規劃試験所 (WRAP) が運営し、TRRN設立以降、JRRNと情報共有を進めてきた。「台湾河川・流域再生ネットワーク」から名称を変更し2012年12月にARRNに加入した。

(JRRN事務局・和田彰)

JRRN 事務局からのお知らせ(3)

第7回 ARRN 運営会議(2012年11月・中国開催)で ARRN 事務局が JRRN から CRRN へ移管しました

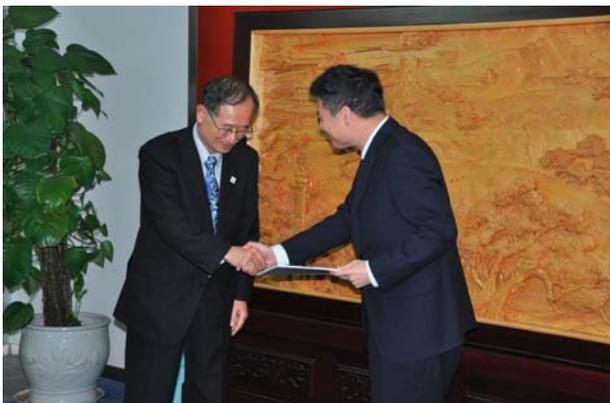


2012年11月24日(土)に、アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の「第7回運営会議」が中国・北京市にて開催されました。

この会議では、2011年11月の第6回ARRN運営会議(東京開催)の決議に基づき、ARRN設立以降6年間の任期を務めたARRN会長(玉井信行東大名誉教授)及びARRN事務局(JRRN)から新体制に交代するため、新ARRN会長(Zhiping Liu 中国水利水電科学研究院副院長)の選出、新ARRN会長からの新ARRN事務局長(Wenxue Chen 中国水利水電科学研究院教授)の指名、更にJRRN(日本)からCRRN(中国)へのARRN事務局移管に関わる手続きが行われました。



第7回 ARRN 運営会議の様子



JRRN から CRRN への ARRN 事務局移管式

ARRN 規約(第10条)では「事務局は各国内ネットワーク(RRN)のローテーションにより選ばれる。事務局の任期は2年とする。但し、ARRN 運営会議で承認された場合は、事務局の再選が可能となる。」とあり、これまで2回の再選によりJRRNが三期連続・6年間に渡りARRN事務局を務めてまいりました。

この事務局移管に6年を要した背景の一つとして、「ARRN事務局の活動資金は事務局によって賄われる」(ARRN規約・第11条)というARRN活動資金に関わる問題がありました。そこで、事務局業務の各国RRNのワークシェアリングを前提とする分掌及び引継ぎルールを定めることで、新体制への移行が実現しました。

特に、これまで事務局を担ったJRRNが引き続き担う職務とその理由、新事務局が新たに担う職務、更に新体制下での各RRN事務局間の情報共有及び意思疎通のルール化など、今回の事務局の移管が、各RRN事務局間のホットライン構築の機会となりました。

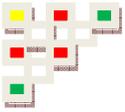
このARRN事務局移管前後の様々な調整段階においては、新事務局となるCRRN(中国)事務局関係者からの様々な協力とこれまでのJRRN貢献に対する感謝の言葉を頂戴するとともに、KRRN(韓国)事務局関係者からも的確な助言と多大な協力を賜りました。

JRRNは、引き続き新ARRN事務局(中国CRRN)をサポートしながら、ARRNの発展に努めて参ります。

(JRRN事務局・和田彰)



第7回 ARRN 運営会議終了後の記念撮影



川系男子の『川と人』めぐり No. 9～遠賀堀川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。



1. 川系男子の初夢

遠賀堀川に昔のごとく滔々と水が戻ってきた。寿命の唐戸からは遠賀川本川の水が取り入れられ、中間の唐戸を通り、流れる。河守神社前にはもやい(船着き場)で舟運船の船頭さんがしばし休憩。折尾駅付近の川沿いには赤い梅の花が咲き、洗たくものを終えたお母さん達が川沿いのオープンカフェで温かいお茶を飲みながらしばし井戸端会議。夕方になると、下校途中の学生が堀川の両岸にある学問の神様の菅原神社で合格祈願。折尾のまちはちょっと御利益のある学問のまち。夜になると堀川沿い飲み屋街は仕事を終えたお父さん達で賑わい、川面には飲み屋街の明かりが映り込む。今も昔も変わらない遠賀堀川のロマンあふれる情緒が今ここに蘇った。

そんな初夢に遠賀堀川への想いを馳せる 2013 年であらいたい。

2. 遠賀堀川を歩く

2012年12月22日～23日に福岡県北九州市の遠賀堀川を歩いた。事のはじまりは、古賀河川図書館の古賀さんからの一本の電話。「遠賀川は日本一の緩傾斜護岸に日本一の河口堰多自然魚道と順調に自然再生が進んでいます。だけど、あと遠賀堀川だけが水が流れるようにどうにかできれば、遠賀川流域は変わると思うんです。河川環境の専門家の白川直樹先生に色々と相談をしたい。」

これをきっかけに白川研究室『川と人』ゼミ内には『遠賀堀川プロジェクトチーム』を新設し、遠賀堀川の勉強会をしながら遠賀堀川の再生に向けて何ができるか地元の『堀川再生の会・五平太』の人らと一緒に考えていくことにした。

その第一弾として、白川先生とともに遠賀堀川に向かった。案内人は『堀川再生の会・五平太』の中村恭子さん。調整役を下さった古賀邦雄さんも一緒に4人で遠賀堀川の河口から起点まで12.1kmを歩いた(図1)。



図1 遠賀堀川全図(折尾駅周辺タウンガイドより)

3. 遠賀堀川のあゆみ

3.1 江戸時代の堀川

遠賀堀川は遠賀川水系から分派する河川で、江戸時代1620年に福岡藩藩主の黒田長政の治水政策により、堀川の掘削が始まった。遠賀川から水を分派し、洞海湾の方に水を流すことができれば、洪水対策のみならず、灌漑用水として活用でき、一石二鳥であった。しかし、工事は難航した。特に水巻町の吉田村（当時）の貴船神社付近「宮ノ尾」は非常に強固な岩盤で、ノミやタガネで掘削していた当時の工夫にとっては困難なものであった。また、工事の最中に多数死人が出るなどしたため、貴船神社の祟りと恐れ、強固な岩盤の掘削というだけでなく、工夫の士気も下がってしまい、工事はなかなか進まなかった。困難を極めた工事は何度も中断され、四期183年の年月を経て1804年完成した。完成により、水巻や陣原の村々ではコメの取れ高が2万石以上となり、宝川になったという。

3.2 明治以降の堀川

遠賀堀川が完成し、年貢米や作物はかわひらた（または五平太）と呼ばれる船で運ばれるようになり、舟運が発達した（図2）。近世の終わりごろ（1840年頃）になると、筑豊炭田で掘られた石炭が遠賀堀川を通り、若松から積み出されるようになり、重要な役割を果たした。最盛期には13万艘を越えた川ひらたがあったという。1904年に官営の八幡製鉄所が完成し、筑豊炭田の石炭が供給され、製鉄が行われるようになり、堀川も日本の近代化を支える重要な役割を果たしていたが、1908年に香月線が完成してから遠賀堀川の舟運は急激に衰え、1938年にはかわひらたは遠賀堀川から姿を消してしまった。

（引用：遠賀川下流域河川環境教育研究会（2008）、遠賀堀川の歴史）



図2 遠賀堀川に浮かぶ五平太船

4. 現在の遠賀堀川

4.1 洞海湾から遠賀堀川を遡る

22日14:30に黒崎駅に集合。まずは洞海湾沿いの工業地帯を見る。官営の八幡製鉄所が設置されて現在まで重化学工業の工業地帯として発展を遂げてきた。ここから日本の近代化がはじまったと思うと感慨深い。洞海湾沿いを歩き、堀川の河口に到着。堀川の下流の方は広い河川敷が広がり、散歩する人の姿がよくみられる。

4.2 折尾のまちと遠賀堀川

折尾に向けて歩くと、金山川と堀川の合流点に。このあたりはまだ一部剃刀堤防のようなかたちになっている。また、合流点より堀川を遡ると一気に親水性は乏しくなった。川沿いに密着したかたちで住宅も並んでいる。水辺へのアクセスは皆無である。さらにこの堀川の水は遠賀川本川からの水が遮断されているため、フレッシュな流水はない。雨水等を西本陣橋付近の排水機場のポンプ場で止めているため、よどんだ水があるだけだ。

それでも中村さん達はこの周辺の小学校や中学校の子ども達とEM団子をつくり、10年近く川に投げ続けた。するとここ10年でBOD値が約8.0から約2.0まで改善されたという。

一般的に川をよくするために「水を綺麗にしましょう」というのが、水質改善策はある程度効果はあっても、これは根本的な解決にはならないと私は思っている。やはり、川にはある程度の水量が必要で、水量でもって希釈し、常に流れをつくることで水中の酸素を増やし、生物活動を活性化させることが水質改善において大事である。堀川にも『環境用水』の考え方が必要ではないかと思う。『環境用水』については秋山道雄ほか（2012）：『環境用水-その成立と持続可能性-』が明るい。

折尾駅に着いた頃にちょうど日没を迎えた。今日はここまで。折尾駅は折尾駅再開発事業に伴い、2013年1月より工事がはじまる。折尾駅は非常に歴史ある駅舎で、1824年に開業して以来、赤レンガのモダン建築の趣きある駅舎を残してきたが今回その原型を留めつつリフォームが行われる。それに伴い、駅周辺の堀川の付け替え、堀川沿いの飲み屋街の立ち退き等、堀川の視点からみると様変わりが予想される。歴史のあるまちだけに折尾駅の改修を惜しむ声も多い。中村さん曰く、折尾駅周辺の飲み屋街の明かりが映りこむ夜の堀川の景観も非常にいいのだという（写真1）。川の水面には反転した飲み屋の明かりと行き交う人の影が映りこんでいた。



写真1 折尾駅付近の堀川と飲み屋街



写真2 吉田の切貫

4.3 吉田の切貫と河守神社

翌日、折尾駅から再スタート。折尾駅付近からどんどん堀川を遡って行く、堀川は折尾駅から延びる福北ゆたか線の線路に沿っていたが、宮ノ尾付近から急に蛇行する。2章でも述べたように、もともとは現在の線路上の貴船神社下を掘ろうとしていたが、立て続けにおこる現場の事故で住民が祟りを恐れたため、栗山大膳がルートを変更した。一度は堀って、とても切りとおせず断念した『大膳堀』のところが今は線路になっていることをしたら大膳も驚くだろう。

『吉田の切貫』付近を通ると鬱蒼とした森になっており、堀川の兩岸の標高が高いことから切り貫いたことが明らかだ（写真2）。堀川の右岸側をみると、ノミ跡が多く刻まれている。当時の大工事の苦労がこのノミ跡の一つ一つにしっかりと刻まれている。吉田の切貫付近を抜けると、開けた河守神社（水巻町）について（写真3）。

河守神社は大山祇命（山の神）、罔象女神（農業用水の神）、興玉命（土地の神）で更に後年、堀川開削工事の恩人福岡藩6代藩主継高を祭った神社であるという（河守神社由緒碑より）。河守神社付近は堀川歴史公園にもなっており、周囲には遠賀堀川の歴史が多く記されている。さらに、神社の鳥居の方向は川を向いており、神社の社の鬼瓦は『水』と刻まれていて、堀川との関連が深い。また舟運の最盛期にはここで休憩をする船頭さんも多く見られたという。

河守神社の存在が堀川の歴史的価値をさらに高めている。古賀さんは「この河守神社を活かした川まちづくりをすることが遠賀堀川の再生につながるでしょうね。」と語った。十分な広い空間もあるので、ここは歴史を活かした川まちづくりが何か考えられそうだ。



写真3 河守神社付近の堀川（神社は左）

4.4 無機質な中間付近の堀川

河守神社のある水巻町を抜け、中間市に入った。中間市付近の堀川はコンクリート護岸で、その中に流路があり、川というには少し違和感のある無機質なつくりになっていた（写真4）。さらに管理用梯子がところどころに備え付けられているだけで水際にアクセスすらできない。歩いていても歴史を感じられないのはやはりどこか寂しい。しかし物は見方次第で、白川先生の目は違ったようだ。「これだけ川幅があるなら色々とは絵は描けそうだね。」先生の目には無機質な河川空間の先にある、水際までなだらかに緑が広がり賑わいのある河川空間の絵が視えているようだ。そもそも今回、川沿いを全区間歩こうと提案されたのは先生であった。普通にテクテクと歩かれているだけでも見えるのだが、実はしっかりと川の全区間を見ながら川の総合診断をしていたようだ。福留修文先生の本に『川の外科医が行く』とあったが、白川先生なら『川の精神科医が行く』といったところだろうか。悲観を希望に変えてさらに上流へ歩き続けた。



写真4 無機質な中間付近の遠賀堀川



写真5 交差する堀川と曲川（堀川は鉄板で遮断）

4.5 堀川に水が流れない原因

4.5.1 その1（岩瀬の伏越）

中間市の岩瀬付近に行き着き、ふと上流をみると驚く光景が目の前に飛び込んできた。なんと急に堀川が終わっている。堀川と曲川が交差している部分で堀川が鉄板で遮られ、上流の堀川と曲川の水が全て曲川のほうへ流れてしまっている（写真5）。川の交差点があるというだけでも驚きなのに、さらに堀川下流行きの水を通行止めをしているのだ。一体どうしてこうなったのか。

歴史を遡れば、このあたりは『岩瀬の伏越』と呼ばれる川の立体交差点であった。逆サイフォンの構造をつくり、堀川の下に曲川を通していた。しかしながら、周囲の炭鉱の掘削により河道の地盤沈下が起こったり、伏越の中にゴミが詰まり、水が流れなくなったりするなどの問題が起こるようになった。結果として出水期には洪水が多発するようになってしまった。

そこでやむなく1986年に伏越を取り外し、堀川を鉄板で区切り、現状の堀川に至るといふのだ。遠賀川からの取水云々や水利権の前にここで堀川が中断してしまっているのは堀川に正常に流量が確保できない一番の問題だ。一見すると、鉄板を開けてしまえばすぐ解決するんじゃないかと思うが、課題点は多い。もともと伏越構造だった場所で、堀川の鉄板を撤去しても堀川の河床の方が高く、曲川が相当な水位を確保しない限り、堀川に水が流れることは難しいだろう。ここは今後の宿題にとっておきたい。

（※この後、一旦、堀川の踏査を中断して、中間駅から直方駅へ行き、遠賀川水辺館に向かった（11:00～14:00）。水辺館については5章で。）

4.5.2 その2（中間の唐戸で水は遠賀川へ帰る）

『中間の唐戸』付近まで到達。この中間の唐戸は2012年で完成から250年を数える県指定の有形文化財である。この唐戸の技術は岡山県の吉井川の唐戸に倣ったものとか。もともとはここから遠賀川本川の水を取り入れていたのだが、砂や泥が溜まり水が取り入れにくくなり、『寿命の唐戸』に取り入れ口を変え、解消されたという。現在ここ歩くと唐戸こそあるが唐戸が必要なほど水は流れていない。唐戸の左岸上流付近では、遠賀川に水が戻っている。黒川と笹尾川の遠賀川への合流のためであるが、堀川に水が流れない原因で考えるとこれも挙げておくべきだと思うので記録しておく（図1）。当時のこのあたりの河道はどうなっているのかまだ調べていないので何とも言えないが当時堀川が機能していた頃と比較したい。

4.5.3 その3（笹尾川から分派する堀川が消えた）

黒川・笹尾川・堀川・遠賀川と様々な川があるので、混乱するが、地図をよくみると、上流の堀川は笹尾川と合流して続いている（図1）。中間の唐戸より笹尾川側に少し上流に行くと、笹尾川と堀川が分派して、一旦黒川に流れ込み、中間の唐戸付近に流れているように地図上では見える部分があるが、どうやら違う。分派付近（新堀川）に行くと、笹尾川に流れるだけで水は分派していない（写真6）。さらに草に茂り陸地化が進んでいる新堀川の先には水門があり、閉ざされていて、どうあがいても堀川の水が連続しない。さらに途中から新堀川の河道の上に導水管が通っている。遠賀川から持ってきた水だが、堀川には流れず、管の中を通して水を引っ張っている。問題は山積している。



写真6 笹尾川と堀川（新堀川）の分派点



写真7 堀川の取り入れ口付近で（撮影 古賀さん）

4.6 ゴールに舞う雪（寿命の唐戸）

いくつかの問題箇所を見ながらさらに上流に進んだ。笹尾川と堀川の合流点までやってきた。ここまで来たらゴール地点の寿命の唐戸はもうすぐだ。足も軽くなる。中村さん曰く「白川研究室ではいつもこんなに歩いているの？これは健康になっていいね！堀川を長年やってきたけどこんなに歩いたのは初めて！」だという。いつも車で見ていただけではわからないものが歩くときと色々と見えてくる。

ゴールも近づき足取りも軽くなってきた。あと少しのところまで雪が舞い散り始めた。舞い散るだけでは綺麗だが、風が吹くとひとたび体温を奪っていく。雨にも負けず、風にも負けず、冬の寒さにも負けず、寿命の唐戸まで到達した。確かにここから遠賀川の水が入ってきている。流れもある。きっと遠賀堀川全区間に水が流れるとこんな感じなんだろう。雪の舞い散る取り入れ口付近で記念写真（写真7）を撮り、堀川12kmの堀川行脚の旅は終わった。

5. 夢プラン方式で堀川再生へ

途中、遠賀川水辺館に寄った。栗箸づくりなど新年を迎えるための行事で賑わっていた。そもそもこの水辺館、「夢からできたものだ」と語るのには直方川づくり交流会の座長（水辺館ゼネラルマネージャー）の野見山ミチ子さん。「私達は平成8年から活動を始めて、『遠賀川になにか拠点になる建物があったら楽しいよね』と活動を始めたの。周りからは『馬鹿じゃないかと思われてもへこたれもせず、恥ずかしがりもせず『夢やから』』と思って、『遠賀川夢プラン』（図4）をつくったの。絵を好き勝手描いてそれをもとに提案式を開いて行政に提案し続けたらある時実現したとよ。」野見山さんの言葉には経験に裏付けされた説得力があった。この夢プランについて松木（2008）ではこう評している。「ふるさとの地域や川が、いつかこうなったらいいなあ」というイメージの共有を図ることを目的にしていることにある。さらに、「誰がいつまで」という義務を負わせていない。この戦略的なあいまいさが、多くの関係者の参加を可能にし、自由な発言を引き出すことに繋がっている。

遠賀堀川もきっと同じことができるだろう。関係する行政は北九州市、水巻町、中間市、福岡県、遠賀川河川事務所だが、夢の絵があれば、ユーモラスに合意形成を実現できるだろう。2013年7月27日（土）に『堀川再生に向けたシンポジウム』が予定されているが、それまでに絵を描くことができればシンポジウムはより充実したものになるだろう。そういえば昔、高校生の頃、新聞の正月紙面に『夢見る筑豊』と題し、YNHCのみんなで絵を描いたことがあった（図5）。

当時は空想だからどうにでもなれというやっつけ仕事の的に書いたが、今見ると奥深いものも多い。夢はいつか本当になると信じて2013年の初夢に想いを託したい。

参考文献

- ・遠賀川下流域河川環境教育研究会（2008），遠賀堀川の歴史，遠賀川河川事務所，pp.1-22.
- ・中村恭子編（2012），遠賀堀川とをりを-記録・記憶・そして願い-，堀川再生の会・五平太，pp23-73.
- ・中村恭子編（2012）折尾駅周辺タウンガイド
- ・河川環境管理財団 HP『河川紀行（河川ビデオ）』：
<http://www.kasen.or.jp/kasenlib/list.html#kyushu>
（最終閲覧日：2012年12月28日）
- ・松木洋忠（2008），『遠賀川・直方らしい川づくり』，九州技報43号，社団法人九州地方計画協会。



図4 遠賀川夢プラン（直方川づくり交流会提案）



図5 高校時代に描いた初夢（毎日新聞 2006年1月1日）



【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川歩きをすること。

水辺からのメッセージ No.44

国土文化研究所 特任研究員 岡村幸二 (JRRN 会員)

時代を生き抜いた赤水門： 荒川放水路の開設時から隅田川への流れをコントロールした旧岩淵水門



撮影：2012年11月（東京都・北区志茂）

- ◆旧岩淵水門（赤水門）は、1916年から8年間の歳月をかけて青山士（あきら）の工事監督のもとで建設されました。1982年に新水門完成に伴いその役割を終えましたが、地元から強く惜しまれて保存が決まり、現在は東京都選定歴史的建造物及び日本の近代土木遺産に指定されています。
- ◆河川敷岩淵地区では10/13から11/11まで、船着場からのクルーズ体験、バーベキュー場の有料使用、軽食・ドリンクサービスなどを実施して、河川敷のにぎわい推進イベントに挑戦しています。

※国土文化研究所は、株式会社建設技術研究所のシンクタンク組織です。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

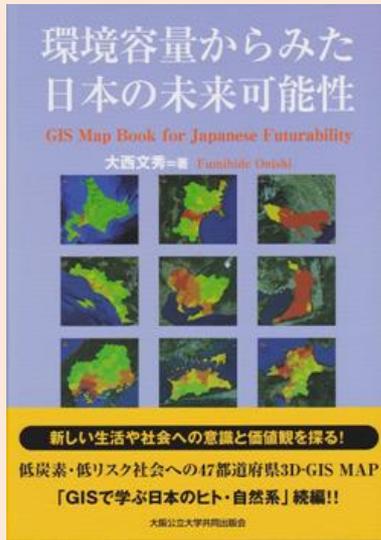
旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

【JRRN 会員からの提供情報】

■受賞書籍『環境容量からみた日本の未来可能性』謝恩案内

JRRN 個人会員の大西文秀様（ヒト自然系 GIS ラボ）が、「ヒトと自然の関係の可視化を目指し、日本の環境容量をマップ化した書籍の出版」の功績により「第 12 回環境情報科学センター賞・特別賞」を受賞されました。

この度、受賞書籍『環境容量からみた日本の未来可能性』の謝恩案内を頂きましたので、皆様にご紹介させていただきます。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/848.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■「河川文化を語る会」

JRRN 団体会員である公益社団法人日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

【第 175 回】

◆テーマ：「近年の気候変動と将来の気候変化」
◆講師：鬼頭昭雄 氏（気象庁気象研究所 気候研究部長）

◆日時：2013 年 1 月 22 日（火） 18:00～20:00

◆場所：厚生会館（全国土木建築健保）（東京都千代田区）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/824.html>

【第 176 回】

◆テーマ：「花を支える。花で支える。～サクラソウ保護と塩害花壇の再生～」

◆講師：木村 亨 氏（青森県立名久井農業高等学校 教諭）

◆日時：2013 年 2 月 15 日（金） 18:00～20:00

◆場所：厚生会館（全国土木建築健保）（東京都千代田区）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/842.html>

【海外からの提供情報】

■「TRRN（台中河川再生ネットワーク）の河川再生啓発動画」紹介

TRRN（台中河川再生ネットワーク）事務局より、河川再生の社会啓発を目的としたムービー（約 7 分）の完成、及び河川に関わる情報ポータルサイトのスマートフォンアプリケーション公開のプレスリリースを提供頂きました。

台湾語（英語字幕あり）ではありますが、台湾の川の様子、川と人との繋がりや温もり、台湾における川の情報発信事情等がよく分かる素晴らしい内容となっております。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/837.html>



【海外からの提供情報】

■「ECRR（ヨーロッパ河川再生センター）の最新ニュースレター（11月号）」ご紹介

ECRR（ヨーロッパ河川再生センター）の最新ニュースレター（2012 年 11 月号）を ECRR 事務局より送付頂きました。

欧州リバープライズ創設案内、欧州の河川再生事例や河川再生に関わる行事開催報告・案内等が紹介されています。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/855.html>

【海外からの提供情報】

■「RRC（英国河川再生センター）の最新会報（Bulletin）」ご紹介

RRC（英国河川再生センター）の最新会報（2012 年 12 月号）を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、急勾配河川における再生事例の話題、英国流域再生基金の最新ニュース、英国環境庁の流域単位での諸施策教訓集、新刊書籍「Making Space for the River」などが紹介されています。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/860.html>

会議・イベント案内（2013年1月以降）

（JRRN/ARRN 主催・共催の会議・イベント）

現在企画中

（河川再生に関する主なイベント）

■平成24年度川に学ぶ全国事例発表会

○日時：2013年1月18日（金） 13:00～18:00

○主催：子どもの水辺サポートセンター

○場所：TKP 小伝馬町ビジネスセンター

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1594.html>

■第8回川の日ワークショップ関東大会

○日時：2013年1月20日（日） 10:00～16:30

○主催：「川の日ワークショップ関東大会」実行委員会

○場所：川口フレンジア

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1600.html>

■第175回 河川文化を語る会『近年の気候変動と将来の気候変化について』

○日時：2013年1月22日（火） 18:00～20:00

○主催：公益社団法人 日本河川協会

○場所：厚生会館（全国土木建築健保）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/824.html>

■第八回「外来魚情報交換会」

○日時：2013年2月2日（土）・3日（日）

○主催：琵琶湖を戻す会

○場所：草津市立まちづくりセンター

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1588.html>

■第6回近畿「子どもの水辺」交流会

○日時：2013年2月9日（土）

○主催：近畿「子どもの水辺」交流会実行委員会

○場所：ドーンセンター（大阪府立男女協働参画・青少年センター）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1550.html>

■第176回 河川文化を語る会『花を支える。花で支える。～サクラソウ保護と塩害花壇の再生～』

○日時：2013年2月15日（金） 18:00～20:00

○主催：公益社団法人 日本河川協会

○場所：厚生会館（全国土木建築健保）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/842.html>

■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に向けた様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。（JRRN事務局）

書籍等の紹介

■ PRAGMO 日本語版 河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き（2012.11 発行）

・発行：ARRN, JRRN

・監修：白川直樹 筑波大学システム情報系 准教授

・翻訳：JRRN 会員ボランティア（10名）

・編集：筑波大学白川（直）研究室『川と人』ゼミ等



※本冊子の入手方法

本手引きをご希望の方は、JRRN事務局までご連絡ください。JRRN 会員限定サービスとさせて頂き、送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。非会員の方は、JRRN 会員登録（無料）後にお申込下さい。

info@a-rr.net / 電話：03-6228-3862

■ アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.2（2012.2 発行）

・発行：ARRN, JRRN

・監修：ARRN 技術委員会

・編集：日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）



※本冊子の入手方法

左記の PRAGMO 日本語版と同様の方法でお申し込み下さい。

info@a-rr.net / 電話：03-6228-3862

会員募集中

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

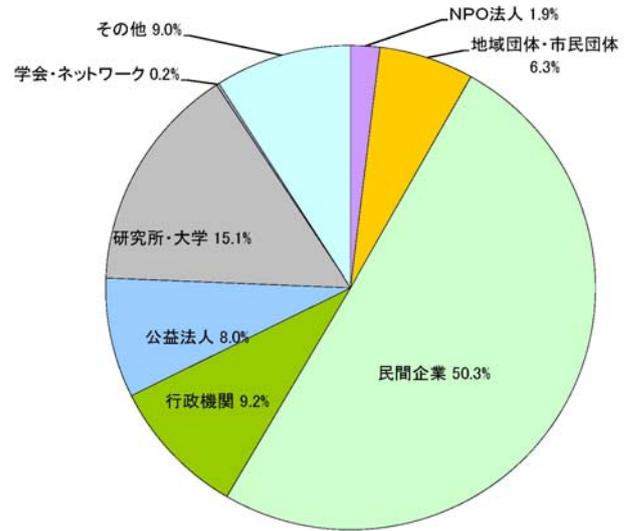
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2012年12月31日時点の個人会員構成
(個人会員数：590名、団体会員数：48団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN	JRRN	非会員
	個人会員	団体会員	(一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【発行・問合せ先】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局
 公益財団法人リバーフロント研究所 内
 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階
 Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

